

令和4年度学校関係者評価シート(年度末評価)

令和5年3月23日

校番	199	学校名	広島県尾道南高等学校	校長氏名	中野 尚人	定時制	本校
----	-----	-----	------------	------	-------	-----	----

学校関係者評価 (中間評価)	A	とても適切である。	B	概ね適切である。			
	C	あまり適切でない。	D	まったく適切でない。	N	判定できない。	

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<p>目標の表記について、中期経営目標と短期目標の中に、生徒が主語の表現が見受けられるが、学校(または教師)が主語になる表記に訂正すべきである。指標についてはアウトプットなので適切と思われるが、「一人もおいていかない授業」を目指し、その達成のために何が必要かを定期的に皆で考え、意見を出し合うことが大切だと思われる。不登校等の問題を抱えている生徒に対し、個々に配慮した支援がなされているが、さらなる工夫・改善の余地があると思われる。</p>
計画の進捗状況の評価の適切さ	A	<p>目指す学校の姿を描きながら、目標達成に向けて不断の努力が行われていると思われる。特に1の経営目標では、評価が全てAとなっているにもかかわらず、学校として、Bの評価をしている。厳しく現状の認識を行う中で、特に、出席率を高めるための取組に、改善すべき点があると思われる。</p> <p>指標の設定について、本年度より年2回アセス「学校適応感尺度」に取組み、そのデータから、向社会的スキルをどう育成するののかという課題が明らかになった。この育成をキャリア教育に位置づけ、評価指標として取り組んでいくことで、学校と社会との結びつきをより強固なものにしていく。</p>
目標達成に向けた取組の適切さ	B	<p>生徒との対話を大切にしながら、支援の観点で丁寧に取り組まれている。一人一人の成長のスピードや到達点は違うと思うので全員を必ず同じ方向に向けなければならないという強迫観念にとらわれないようにすべきである。その取組の中で、子どもたちが、学校へ来ようという気持ちをアップできるように、実態よりもちょっと上の目標設定をし、達成できる満足感を与えてもらいたい。</p> <p>ただ、配付資料には具体的な取組が明示されておらず、適切さについて評価できない。取組の具体例を明示し、評価の観点等を整理し、振り返りを行うことで次年度に向けた取組に活かすことができると思われる。</p>
評価結果の分析の適切さ	B	<p>分析についても、数字の増減に一喜一憂するのではなく、例えば、「授業遅刻率が9.0%に増加したこと」について、なぜ増えたのか、なぜ時間を守るというルールが定着していないのか、生徒との対話を通して知ることが大切ではないか。そういった意味で、2、3年生の出席率の低さ、遅刻率の高さについてはどのような分析がなされたか、この資料では不明である。結果の要因等を仮説的に検討することが分析であるとすれば、各部(分掌)において、どのような検討がなされたのか、そのプロセスを説明してもらいたい。</p>
今後の改善方策の適切さ	A	<p>適切にかつ具体的に方策を掲げていると思われる。さらに多くの時間や労力が必要になるが、方向性としては、子どもたちが「夢と自信」を、「命」を大切にできる子どもに育つように、自分を信じ、自分を認め受け入れられるよう、自己肯定感を高めるための支援を増やすと良いと思われる。</p> <p>学習面では、県内の小中で実践されている個別最適な学び(イェナプラン)や定時制高校の検定受検の取組が参考になるかもしれない。</p>
総合評価	A	<p>生徒が主体となって活動できる取組を増やすことで、生徒は確実に成長しているように思われる。3年間のコロナ禍で失ったものも大きいとは思いますが、本来の目標を目指してもらいたい。南高祭や卒業式に出席して、あらためて南高の先生方の熱意を強く感じた。「一人の生徒も置いていかない」ことを目指して、どの先生も頑張っていると強く感じた。一人一人の通学する意味、価値をしっかりと指導していく中で、子どもたちの自己肯定感を高めるよう支援・指導をしっかりとってもらいたい。</p> <p>対話を基軸とした教育活動の推進に大いに期待している。R-PCDAサイクルに則り、「一人の生徒も置いていかない」、「生徒一人一人の最善の利益を実現する」、チーム尾道南高校に発展していくように応援している。</p>